

特集 アフガニスタン

内藤正典

はじめに

2010年6月19日（土曜日）、アフガニスタン・イスラーム共和国のハーミド・カルザイ大統領は、同志社大学を訪問され、グローバル・スタディーズ研究科の学生を中心とする大学院学生との対話集會に臨んだ。公式実務賓客として来日した大統領は、当日の午前、広島を訪問した後、午後に京都に到着された。最初に約15分のスピーチをされた後、学生の広範な質問に答えるかたちで対話集會が行われた。ここでは、大統領のスピーチと、学生との質疑応答の邦訳を掲載する。

アフガニスタンの現状は、安定には程遠い。アメリカは、依然として『不朽の自由』作戦という軍事行動を継続しつつ、NATOを主軸とするISAFによる治安維持活動が行われている。このような現状では、外国軍による占領ないし、侵略と受け取る勢力の反発を抑止することは困難である。

このスピーチと学生とのやりとりにおいて、カルザイ大統領は、このような現状をふまえて、アフガニスタンでの平和構築に何が必要なのか、かなり踏み込んだ発言をしており、将来、歴史的に貴重な資料となりうるものである。

アフガニスタン共和国 カルザイ大統領 講演

要旨

同志社大学学長及び副学長、そして副大臣、大使、同志社大学の学生の皆さん、本日はお招きいただきありがとうございます。学生と時間を共有できるのはいつも嬉しいものですが、とりわけ130年以上の伝統を有する同志社大学の学生の皆さんと対話の機会を持つことを嬉しく思います。

学生の皆さん、これからアフガニスタンについてお話する前に、先日私が訪問した広島での出来事について触れないわけにはいきません。広島では、平和記念資料館を訪れました。我々が平和記念資料館を訪問した際、館の管理者の一人が、当時16歳の学生として原爆投下に遭った際の恐ろしい経験について話してくださいました。原爆、それは閃光と熱であり、暗闇であり、そして苦しみでした。30年間にもわたる苦難、人々の死、そして戦争の時代を経てきたアフガニスタ

ンのような国にとって、苦しみというのは常に身近にあるものです。苦しみがいかなるものであるか、すぐに理解し、感じるができるのです。しかし、広島や長崎の人々ほど苦しみを経験してきた国や民族はどこにもいないでしょう。いかなる警告もなく突然訪れた痛みというのはすさまじいものがあり、そうであるからこそ、その痛みは今日まで世代を越えて受け継がれているのです。私は、この世が存在し、また人類が存在する限り、二度とこのような恐ろしい出来事が起こらないことを願っています。また私は、原爆を保有している国家や原爆を保有していることに対して誇りを持っているような国家は全て、むしろ原爆保有を恥じるべきだと思っています。原爆を保有しているということは何ら誇るべきものではないのです。原爆は今後有用になることはないのです。こうした国家は原爆を作るのではなく、むしろ花を咲かせるべきでしょう。我が国を代表して原爆の痛みを深く共有する私の思いを皆さまに理解していただけるものと思います。いかに長い月日が経とうとも、人々の記憶から原爆という出来事を消し去ることはできないのです。

皆様、冒頭でも申し上げたとおり、アフガニスタンは30年間にわたって様々なかたちでの苦悩と戦争の時代を経験してきました。ソ連軍による軍事介入に始まり、国内の内部抗争などを経て、約3千人もの尊い命が失われた2001年の9.11の悲劇が起こってからは、世界の関心は一挙にアフガニスタンへと向けられることになりました。まさにそこから、アフガニスタンは国際社会の助けを得て自らを解放し、再建への道を歩み始めたのです。我が国の再建はいくつかの分野において、明るい見通しが立ちつつあります。とりわけ、教育、女性の権利、インフラ再整備に関しては、非常に迅速な対応と実りの多い結果がもたらされており、端的に申し上げますと、我々が復興を目指すことになった2001年の時点で、国家として有していた統計としてはたった3校の大学に約4千人の大学生が登録されていたのみでした。今日では、その学生数は8万人近くにもものぼり、そのうち約35%は女性が占めています。大学数も3校から16校に増加し、また各州に少なくとも一つ以上の学習施設が存在するまでになっています。女性たちの社会進出も著しいものがあります。なぜなら、第一に、アフガニスタン憲法では、議会において女性議員が最低25%の議席を占めるべきであると定めているためです。したがって、我々は女性に投票する義務があるのです。現在では27%以上の議席が女性で占められており、つい2週間前に開催された和平ジルガにおいても、アフガニスタン全土から集まった1600人以上の参加者のうち、21%以上が女性でした。このことは我が国において非常に誇るべきことであります。

経済回復については、降水量不足や干ばつ、あるいは洪水などが時として起こる我が国において、困難がありながらも非常に健闘しているといえるでしょう。

30年前からアフガニスタンは最貧国でありましたが、その後の紛争により、さらに貧しい国家へと変貌してしまいました。統治機能の崩壊により社会経済基盤や人材はほぼ壊滅的な状態となり、様々な公共施設や諸制度も瓦解寸前となりました。9年前の新政権発足当初、我が国の一人当たりのGDPは150ドルしかありませんでしたが、現在ではそれが500ドル以上にまで上昇しています。また20億ドル程度であった我が国のGDPは、現在では150億ドル近くにまで上昇しました。我が国の外貨準備高も、1億8千ドル程度から45億ドルへと上昇しました。国内交通網については主要道路をほぼ完成したほか、5～6%以下であった電気の供給も約50%程度にまで上昇しつつあります。農村開発、灌漑、耕作活動につきましては、ご存じのとおり我が国は世界の中でも果物の生産において優れていますので、まずはこの分野を引き続き推進し、いずれ日本にもブドウやザクロなどを輸出できればと思っています。

ところで、日本という国は、古い歴史と伝統を有する社会であることはよく知られていますが、私自身、広島を訪れたことで、日本が平和を重視していることを認識するにいたりました。アフガニスタンと日本の広い意味での正式な外交関係は8年前から始まったと言えますが、それ以来、日本は常にアフガニスタンに対しあたたかい支援の手を差し伸べていただいています。とりわけ平和構築、武装解除と武器の回収、道路建設などのインフラ整備、農村開発、教育支援などの分野で、これまで多額の支援を行っていただきました。教育支援の一例として、本日ここにもアフガニスタン人の学生がいますが、彼らのように学生や人材育成事業の一環として日本で学んでいる人たちがたくさんいるのです。また、カブール国際空港の新ターミナル建設に対する日本の支援も忘れるわけにはいきません。新ターミナルのおかげで現在ではより多くのフライトが世界各地から就航できるようになっています。さらに日本は、我が国に対して今後5年間で最大50億ドルの支援を約束しました。その支援がアフガニスタンの国民に継続的影響を及ぼすような事業に対して使われることを願うとともに、我が国の政府がこの貴重な財源を効率的に正しく、そして必要とされている事業に対して用いられるよう対応すべきであると考えています。

地球上のすべての社会や国家同様、アフガニスタンの国民もまた、平和を望んでいます。そしてまさに平和と和解のために、我が国で和平ジルガを開催したのです。1600人以上が参加した和平ジルガは全会一致で様々なことを決定しました。具体的には、平和への希求、犯罪証明や裁判所の判決なしにアフガニスタン国内で拘束されたタリバンなどの釈放、近隣諸国と共に平和構築に取り組むこと、また同時に国際社会とりわけ日本に対してアフガニスタンやその近隣諸国の平和構築に向けた積極的な参加を呼びかけることなどです。しかしまた同時に、和平

ジルガは平和のために敵からも距離を置くということも重視しています。すなわち、我々の生活様式や自由、憲法といった我々が成し遂げてきたことを許容しないアル=カーイダやその他テロリスト集団に対しては、継続的な抵抗が必要であるということです。しかし実際には、日本の衆議院議長による発言のように、タリバンが多くは我々の生活様式やアフガニスタン憲法を拒否していません。タリバンが多くはアフガニスタンの敵でも他の社会にとって有害な存在でもありません。アフガニスタンが平和を取り戻すためには彼らと共に取り組むことが必要となります。したがって、アフガニスタン国境を越えてパキスタンや庇護のもとにいるタリバンの指導者との和解を目指した再統合を呼びかけているのです。それはより政治的な側面が強いものとなり、アメリカや他の同盟国の関心事項でもあります。

和平ジルガの勧告ではまた、来る7月20日に開催予定のカブール国際会議にアフガニスタンの和平についての議題を含めることを要求しました。願わくは、日本の外務大臣がこの議題を国際的に主導し、国際的な支援が得られることを期待しています。そして、来年初旬に東京もしくは京都、あるいは貴学にて主要な関係国を集めた和平会議を開催することを希望しています。そこでアフガニスタンの平和プロセスのあり方を検討し、他の世界に対して平和プロセスの一例を提示できるのではないかと考えています。

時間も押し迫ってきましたので、私のスピーチを終えたいと思います。皆様からのご質問があれば喜んでお答えします。ご静聴ありがとうございました。

Q1.

はじめまして。本日は大統領の貴重な演説をお聞きする機会を得ることができ、とても光栄に思います。私は、この数年の間にアフガニスタンの教育や討論の場で女性の権利が発展してきたこと、更に、アフガニスタン政府が女性の権利の問題を更に多く公認し始めたことに対してうれしく思います。また、ジルガがタリバンのようなテロ組織に対抗していることを印象的に思います。しかし、私は一つの疑問を抱いています。それは、大統領もご存じのように、米国のアフガニスタンへの米軍兵士の追加増兵における国際社会からの批判についてです。大統領は、アフガニスタン駐留米軍兵士がアフガニスタンのインフラストラクチャーの整備や民主主義の確立、タリバンのようなテロ組織に対する国家安全の保障において長期的な利点があるとお考えですか。

A1.

アフガニスタンに駐留する米軍に関する質問は、国際社会、米国、そして、ア

フغانستانにおいて討議してきた問題です。米軍の駐留については、それを賛成する立場もあった。そして、米軍が駐留することに伴う効率や成功に対する見方に賛同しない立場もあった。

アフغانستانは、駐留多国籍軍の在り方を二つに分けて考えます。一つは、同時多発テロ以降の多国籍軍の目標であった、パキスタンやアフغانستانの地域におけるテロ組織のネットワークやアルカイダとの戦いです。アルカイダはこれらの地域に彼らの軍事拠点を構えており、それはニューヨークで同時多発テロを起こす以前からアフغانستانや他の国の地域に対し何年にもわたって幾度となく攻撃を仕掛ける際の拠点でした。これに対しては、米国をはじめ、NATO、ヨーロッパ諸国といった世界中の国々からの支援を受けました。

米国、ヨーロッパ諸国、そして アラブ首長国連邦といったイスラーム諸国により編成された駐留多国籍軍のもう一つの目的は、長年にわたるアフغانستان国内の紛争の中で破壊されたアフغانستانの軍備力と警備力を回復させるための訓練を支援することにあります。

これは、アフغانستانの国としての能力を回復するためのものであり、また、アフغانستانを再建することなのです。この支援というのは、アフغانستانが自らの力で自らを守ることを可能にするためであり、アフغانستانが制定した制度のうえの人とアフغانستانの人々が合意できる基盤をアフغانستانにもたらすことです。私たちは、駐留多国籍軍をその苛酷な任務から解放できるように、また、アフガニスタからの謝意をもって駐留多国籍軍が安全にそれぞれの国に帰国できるようにアフغانستان軍の兵力を増大することを早急に行っています。

Q2.

大統領。あなたは外国の軍隊から独立した、前アフغانستان政権、つまり“アミール・アル＝ムーミニーン”（イスラーム信徒の長）を認めるアフغانستان・イスラーム首長国（タリバン政権を指す）を統合し、真の意味での主権をもった連立政権を成立する準備はできていますか。

A2.

えーと、これはとても難しい質問ですね。あなたは本当にアフغانستان・イスラーム首長国をアフغانستانの正当な政権であると信じているのですか。これは政治的な質問ですね。わかりました。それでは、比較をしましょう。そして、比較をして、それを私の答えとしましょう。結局のところ、政治学というのは比較ですよ。大学で政治科学を専攻する学生であっても、政府と政治の比較

の科目はあります。それはまだ政治科学の科目の一部ですね。

わかりました。そうであるのなら結構です。タリバンが政権の座についていたころ、我が国はパキスタンとサウジアラビア、そしてアラブ首長国連邦の三つの国家にのみ認められていました。今日では、アフガニスタンは80や60カ国に認められています、いや、60カ国プラス…

(閣僚に確認) 190? 190カ国にみとめられています。

あ、国連加盟国すべてに？

そうですね。そうですね。

今日では、アフガニスタンは、国連により認められています。190カ国だとか195カ国あたりでしょうか。アフガニスタンは、もし間違っているのであれば外務大臣が訂正をしてくれますが、60をこえる国に外交代表部をもっています。そこには大使や外交官がいます。ちょうど昨夜、新しいアフガニスタン大使館を東京に開設しました。とても素晴らしい、また大きい建物の中に東京のアフガニスタン大使館があります。アフガニスタン国内の諸外国の在外公館は、60人以上あります。国連やNGOなどを含めると、40以上の国際機関もあります。我々はタリバン時代には一つのラジオ局しかなかったですし、テレビ局さえありませんでした。彼らはテレビ局を閉鎖しました。今日我々は、あまりうまくいっているとは言えませんが国営のテレビ局をもっています。また22のとてもとても成功している民営のテレビ局があります、100をこえるラジオやニュースのチャンネルがあります。今日では、アフガニスタン国旗が世界中で舞っています。ここにもあります。(テーブルにある旗を持つ) ですから、アフガニスタンの国家の正統性は、全世界に示されていると思います。現在の我々は民主国家です。大統領選挙と議会選挙の二つの選挙があります。そして二ヶ月後には、あらたな議会選挙があります。もうすでに二つの地方議会選挙を実施しました。繁栄し、活気に満ちた社会であり、より良い経済状態に向かって発展しています。しかしまだとても貧しい状態です。社会発展、政治や経済発展において、とても深刻な問題があります。またテロリストの攻撃を受けています。(一息つく) 満足のいく回答でしたでしょうか。はいなんでしょうか。

ところで生徒の例をあげていませんでした。学校の生徒はタリバン時代の7年前、9年前は七十万人の生徒しかいませんでした。それは主に、ほとんど男子生徒で、女子生徒は学校に行くことは認められていませんでした。今日では7百万人が学校にいます。女子生徒はおそらく40パーセントです。40です。

Q3.

ご講演ありがとうございました。汚職の問題について質問をしたいと思います。

主要なドナー国として、私たちは、ODA（政府開発援助）のお金の流れについて、とても気にかけております。

軍閥といわれている彼らが、「統一された」アフガニスタンという意識をもっておらず、そして彼らは、国家統合のプロセスに参加しようとしません。

国家統合にとって、この重大な欠点は、汚職の原因のひとつと思われます。軍閥や、そしてまた各地域の民族のリーダーを含むアフガニスタンの国家統一を作り出すことが必要とされることについて、大統領はどのようにお考えですか？

A3.

はい、そうですね。アフガニスタンという国は、世界中、特にメディアにおいて、言われているのに反して、とても統一された国です。人々についていえば、統一されています。

例えば、ちょうど10年前の和平ジルガにおいて、我々は、アフガニスタン国内から、1600名の国会議員を選出しました。それは、様々なグループ、様々な価値観を持った人々で構成されています。そして、(大統領)選挙において、私(カルザイ)の対立候補者を支援していた人を、和平ジルガでは、議長として選出しました。

つまり、私のライバルは、1600名の和平ジルガの議長として選ばれたということです。政治的寛容の観点においては、アフガニスタンは、驚くばかりに良くなっております。

(駐アフガニスタン日本国)大使がここにいらっしゃいますが、大使は、アフガニスタンの報道について目にされ、お聞きになっていらっしゃるかと思います。しかし、それらの報道は、私に賛同せず、すべて私に反対しています。つまり、報道の自由があるということです。

軍閥は、それどころか、議会の一部になろうとしています。彼らは、選挙に立候補しています。我々はもはや、「軍閥」という言葉を使用しません。それは、すでに過去であり、彼らはいまや、政治的なリーダーであるのです。彼らは議会の中に、政府の中に、社会の中に存在しているのです。

はい。確かに、アフガニスタンにおいて、汚職は現実存在しています。それは主に、二つの原因があります。

一つ目の原因は、アフガニスタンのほとんどの地域が、完全に崩壊していたことです。例を挙げてみますと、1920年代から1980年代にかけて、アフガニスタンでは、公共事業が機能していました。エンジニア、医者、経営者、専門家、教師、銀行員を育て上げることができていました。

ソビエト連邦がアフガニスタンに侵攻した時、我々は、彼らに抵抗し始めました。そして、500万の人々が難民となりました。500万という数は、(当時の)我々の人口の約35%の割合に相当します。国民の約35%ですよ。(難民は)パキスタンには300万人、イランには200万人が存在し、我が国のエリートの約50万人が、ヨーロッパやアメリカに亡命しました。医者やエンジニアの人々もそうです。

このようにして、2001年には、アフガニスタンには、法律や政府、秩序、経済が存在していませんでした。アフガニスタン全土で、あるいはある地方で、解決しなければならない問題が多々ありました。2010年、日本が、アメリカが、皆、世界中が、アフガニスタンに注目しました。それは、莫大な資源が埋まっていたからです。そして、それらの資源のマネジメントは、今日になってもなお、とても困難な問題となっております。

つまり、簡潔に述べますと、能力不足が問題なのです。これが一つ目のポイントです。

それから、我々のような国、つまり、第三世界国家、そう、いわゆる第三世界国家の中では、アフガニスタンの財務管理能力は、世界銀行やIMF(国際通貨基金)によって、世界最高とランク付けされています。政府の財政システムにおける我々のマネジメントは、大変優れており、(そのマネジメントの範囲は)拡大しております。

しかしながら、アフガニスタンにおける汚職のもう一方の問題は、欠陥のある、非効率な契約のメカニズムです。国際的なドナー(援助)から与えられる契約——大変よくできていて確実・的確なコントロールされている日本の契約のことはありません——特に、大部分はアメリカやヨーロッパの国々との契約ですが、アフガニスタンにおける契約の一部は、いくつもの副次的な契約(sub-contracts)を伴っており、そこで、多くのお金が失われるのです。

アフガニスタンにおける汚職のもう一つの原因は、我々の同盟国の一部が、民兵組織や輸送のための武装組織を作り出し、それらの組織が、アフガニスタン政府軍とほぼ並行して活動していることです。アフガニスタン政府はそれらの組織をまったくコントロールすることができず、そのことが、無秩序、汚職、そして資源の無駄遣いを引き起こしています。

これが3年前のパリ会談で、我々が、国際社会のメンバーたちと話し合った問題です。3年前のパリ会談以来、我々は、この問題について、話し合ってきましたが、この問題には長い時間がかかるでしょう。しかし、それが現実なのです。

我々はこの問題と闘い続け、誤りを正し続けていかなければなりません。

現在では、これら全ての問題について、我々は協力者からの理解を以前よりも得ています。

Q4. (3I100201 権 梨奈)

今朝の広島訪問に関する事で、核についてお尋ねしたいと思います。アフガニスタンはイランとパキスタンの間に位置しています。パキスタンは核保有国です。イランの核開発は私たちにとって深刻な問題です。ここで質問です。あなたの国の非核拡散の役割は何ですか。また、核の平和利用に関する大統領のお考えをお聞かせください。

A4.

私の個人的な意見としては、平和であっても、そうでなくても核には反対です。経済的な面からいえば、私たち国々だけではなく世界全体に与える影響を考えてみるとします。世界を危険におとしいれないような保護手段が存在し、また、私たちがエネルギーを作り出す、電気を作り出す核使用を管理できるならば、渋々ではあっても核使用を容認するしかないでしょう。

ただ、核を兵器とする場合にアメリカからイランまで、またロシアも含めて核兵器をもつすべての国に対する私の忠告は、核兵器は何の助けにもならないということです。

彼らは時間を浪費しているだけです。

しかも、彼らが今までのところ作り出してきたものは彼らにも、私たちにとっても多大な被害を与えています。

だから、彼らは核兵器をどこか安全な場所に保管し、使おうなどと考えるべきではないのです。

また、核兵器を持たない国も、核兵器は何の助けにもならないし、資源をムダ使いし、環境を破壊し、国中にマイナスの影響をまきちらすものでしかないということを知っておくべきなのです。

Q5.

大統領、私の質問を受けて頂きありがとうございます。先ほど、仕事を増やし、経済活動に参加する機会を作るといった方法によるタリバンとの再統合、和解の必要性についておっしゃっていましたが、2002年以降タリバンの戦士たちは、

開発へ向けての国際的取り組みを妨げ、暴動を起し続けています。そこで私の質問は、(国家単位の再統合政策との関係を考慮すると)仕事を増やし、経済活動に参加する機会を提供する政策によって、実際にタリバンの戦士たちを短期間のうちに再統合できるのか。そして今現在考慮されている再統合の方法はこれだけでしょうか。

A6.

経済開発はアフガニスタンに平和と安定を取り戻すにあたっての一つの局面です。この国の一般大衆は経済的に大変貧しい状態にあります。そして、アフガニスタン政府はこのような状態を改善するような活動、たとえば仕事を増やす、経済の強化といったことができていない。このような状況にあっては、多くの若者が政府に不信感を持ち、わずかなお金を稼ぐために過激派の活動などに参加、アフガニスタン、そして他の者を敵にまわし、操られるのは当然のことです。仕事を増やすということは、アフガニスタンで再統合政策を進めるにあたって、とてもとても大切な要素です。アフガニスタンに帰還した人びとの安全が脅され、嫌がらせを受けることなく安心して暮らせる環境、そして経済活動に参加する機会をある程度与えられ満足な暮らしが営めることが必要なのです。

Q6.

ご来日とともに素晴らしいお話に感謝します。わたしは宗教について尋ねたいと思います。宗教が戦争や紛争の原因として批判されていますが、わたしはそうは思いません。そこで、大統領にお聞きしたいのですが、アフガンの平和ひいては世界平和を実現するにあたって宗教の役割とは何だとお考えですか。

A6.

あなたに賛成です。宗教が常に戦争の原因であるとは思いませんが、ときには勃発の原因にもなることもあるでしょう。しかし、主として宗教とは(神の御加護)と慰め、また精神の安定をはかるためのサポートから成り立つものです。そういったさまざまな(宗教という)サポートシステムとともにコミュニティは良くなるものだとはわたしは考えています。(ならば)宗教はときに社会や個人に必要なサポートをするものであって、決して戦争の原因とはならないでしょう。

わたしの意見として、今日の世界において戦争の原因は国民国家のコンセプトとともに始まったと考えています。国民国家のなかでわたしたちは自身や利益を定義し、ほかの人々の利益を犠牲にしてまでおのれの利益を追求(しようと)す

る、そうして戦争は起こるものです。つまり、国民と呼ばれる、ある人間が利益を追求することで他人の利益は無視されることになります。おのれの利益を追求することは不幸な結果を招きかねないでしょう

わたしに賛同するものは閣内にはいませんが、これがわたし個人の意見です。とくに政治学を学んだ閣僚が批判しますが、わたしは現代の国民国家の考えには反対なのです。

Q7.

お話を聞かせ下さりありがとうございます。そして、ここでお会いできたことを光栄に存じます。日本の朝日新聞で知ったのですが、明日、アフガニスタンから日本への（いにしへの）贈り物を観覧しに奈良を訪問されるそうですね。新聞によると日本とアフガニスタンは1000年もの間、歴史的文化交流がされているとのことでした。

そこで私の質問ですが、この先アフガニスタンと日本の間でどのような文化的交流が可能でしょうか？あなたは将来的展望で、アフガニスタン日本間の積極的文化的交流の可能性についてどのような考えをお持ちですか？

A7.

とてもよい質問ですね。とてもよい質問だ。私は、私たちの文化はとても似ていると思う。特に今回の訪問で類似点が見えました。1000年前、アフガニスタンの僧侶がラピスラズリの緑の高価な宝石を日本に持って来、それが奈良の博物館に収められています。私たちがパスポートを持つ前に旅の交流は始まっていたのです。僧侶はパスポートなど持っていなかったし、日本のビザをとってもいなかった。中国のビザもとっていなかった。インドのビザもとっていなかった。彼はとりわけヨーロッパのビザをとっていなかった。彼はここへ直接来たのです。2つの文化の間の移動の自由は、それぞれの知的交流でした。その他、文化的類似性の重要な面は、人々が父親や母親そして社会に対して尊敬をするという礼儀正しさやしつけの文化を私たちは持っていることです。私は、特にその点で。日本とアフガニスタンは同じだと思います。本当にアフガニスタンと同じです。そして、住環境において言えば、わたしは日本の学生たちがどのように過ごしているかということに驚かされた。昨日、私は国会、諮問委員会、議会にいたのだが、そこには地方から訪れている子供らもいて、彼らは私が外国から来た誰かだということを知りました。そして、私が彼らのそばへ近寄ると彼らは元気いっぱい盛上がりを見せ、私はまるでアフガニスタンのようだと感じた。

しつけという点で、残念ながらアフガニスタンでは衰退しています。私たちは

日本からもう一度（しつけを）取り戻し、回復させなければいけない。それは、文化的に必要な点だと思います。

我々の社会においては、目にみえないものが多くありますが、私たちはそれもシェアしています。アフガニスタンで私たちが家に入るとき靴を脱ぎます。これらは、特に他の文化からきたものでしょう。

みなさんはもっとこの文化的類似点を感じることでしょう。彼らは靴を脱いで部屋に上がり、マットレスに座っている。いすに座らないということも、日本と文化的に似ている点です。私たちはいすに座らない。私も自分の家や部屋ではいすに座らない。私はマットレスの上に座り、本を読んだりテレビを見たりしている。私は、大統領官邸にいる時だけいすに座りテーブルを使って過ごしている。以上のことから、互いに多くの文化的類似点があり、よいものを私たちは持っている。それは、世界を超えてシェアされているのです。

Q8.

国際的な報道機関が注目し、先週、話題になっていたのは、アフガニスタンの鉱山資源の発見です。また、対立の潜在的な形態と、大統領が先ほどおっしゃっていたことを考えれば、汚職の問題とともに、アフガニスタンの国家として機能が欠けていることを早く解決することが話題となっていました。そこで大統領にご質問いたしますが、鉱山資源の発見が将来のアフガニスタンにどのような影響を持つとお考えになりますか。

A8.

ご存知の通り、アフガニスタンは私たちや世界が過去に知っていたものが、今、あります。しかし、それは確証や証明はされておらず、科学的にも明らかになっていませんでした。アフガニスタンとアメリカの地質調査所は2005年からアフガニスタンに、私たちが知っている以上のものがあるのかどうかを証明するために、一緒に調査を行いました。2007年にその結果が表れました。そして、さらに2年間、アメリカの防衛省と地質調査所とそしてそのほかに私たちの資源の発見を大いに助けてくれた機関と一緒に、その資源の質、深さ、量、そして種類を分類しました。そして、私たちが考えていた3倍以上の石油や天然ガスがあることがわかりました。

また別に、我が国にはとても良質の銅の鉱床がありますが、それはすでに中国が興味を持っており、開発に40億ドルを投資しています。また、世界の中でも純度70%をこえる豊かな油と、国に広がるリチウムはコバルト、そのほかの全ての科学資源は今、まだ我々にはわかりませんが、その合計の価格は一兆から

三兆ドルになり、今、我々が知っているのは、その 30% でしかありません。

そこに競争が生まれるのはわかっていますし、それは利益のための競争であることは確かですが、私たちアフガニスタンとしては十分に対応できるし、資源を上手く取り扱うために管理し、アフガニスタンの鉱物資源によって対立がうまれないようにする能力があります。

そういう理由で、我々は何よりもまず、日本企業がアフガニスタンに来て、投資することに関心を寄せています。なぜなら、我々は今まで日本が我々を助けるためにしてくれたことに対して何かお返しをしたいからです。60 億 5 千万ドルもの日本からの政治的な支援もありましたが、日本の投資を歓迎します。

良い質問をありがとう。私はあなたたちがアフガニスタンの鉱物資源を知っていることがうれしいです。ところで、このなかに、アフガニスタンの鉱物について知っている人はどれくらいいるのかな。ああ、十分です。私たちの国にとって大変、助けになります。ありがとう。